



新年明けましておめでとうございます。

昨年は、私の議員活動に対し、深いご理解と温かいご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年は、時間の流れの速いことを実感する一年でしたが、それとともに“いのち”の尊厳がいとも簡単に犯される社会になってしまったことに心を痛めた一年でもありました。

栗東市でも学校の安全対策としてフェンスの設置や不審者情報通報システムの導入など進めてはいますが、まだまだ十分とはいえません。

家庭での教育はもちろんのこと、地域での取り組みなども強化が必要です。

“いのち”といえば、“改正”か“護る”かの論議が進められている「憲法問題」もあります。

この“憲法”については、国民のどれだけの人が正しく理解しているのか疑問ですが、正しい理解の上での国民による投票が重要だと考えており、“憲法”に関する映画会の開催と学習会を実施したいと考えています。

また、昨年は、「命に国境はない」というテーマで、04年にイラク武装グループに拘束された高遠菜穂子さんと、「いのちの学級」で有名な金森俊朗先生の講演を聴く機会に恵まれ、お二人とも“いのち”の現場で活躍されている方であり、私の心に響いた講演でした。

今年こそは、“いのち”がしっかりと守られる社会になることと、ゆったりとした時間の流れが感じられるような充実した一年であればと思っています。

今年もご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



▲無敗の三冠馬ディーブインパクト号を破り、有馬記念G Iで優勝したハーツクライ号とのツーショット！

栗東市議会議員 田村隆光

## 12月議会報告 議案第122号議案「さくら」の指定管理者指定で委員会紛糾！継続審査に！

### 今議会のポイント

12月定例会のポイントは、何といっても議案第122号の「さくら」の指定管理者指定に関する議案であり、付託された私の文教福祉常任委員会では、この議案だけで3日間を費やし、すべて一般公開とした中での審査となりました。

結果は、3日間を費やしても結論は見出せず「継続審査」という結果になりました。

その他、今定例会で審査した議案は、予算8件、条例5件、指定管理者の指定8件、その他4件、

請願書4件、意見書2件、要望書20件でした。

### 指定管理者制度とは？

指定管理者制度とは、多様化する住民ニーズに応えるとともに、より効果的、効率的に、公の施設の管理運営を行うために民間の能力を活用しつつ、住民サービスの向上を図ることを目的とするもので、平成15年9月から施行された法律により、3年以内（平成18年9月1日まで）に管理委託をしているすべての「公の施設」について市の「直営」にするか、「指定管理者制度」に移行するかを決め

なければならないことになっています。

これまで、公の施設の管理を自治体が外部に委ねる場合は、相手先が市の出資法人や公共的団体などに限られていましたが、今回の指定管理者制度の導入により、市議会の議決を経て指定された民間事業者を含む幅広い団体（指定管理者）に委ねることができるようになります。

### 委員会での争点

この議案は、栗東芸術文化会館さきらの管理運営を、これまでの栗東市文化体育振興事業団から、

『平成18年4月1日より向こう5年間JR西日本総合ビルサービス社(以下、JRBS)に指定する』というものでした。

審査の中心となったのは、①市民への情報公開の問題、②審査員選定と専門性の問題、③JRBS社の企画運営能力の問題、④栗東市文化体育振興事業団職員の雇用問題、⑤栗東市の文化芸術振興策などが主なものでした。

とりわけ委員会で多かった意見は、▽極めて公共性が高く文化や芸術といったものを扱う団体として、公募が正しかったのか?▽なぜパブリックコメント等を活用しなかったのか?▽公募から申請、審査までの経緯が不透明である。▽JRBS社は文化芸術に関するノウハウを持っているのか?▽雇用問題について市の責任は?など意見が出されましたが、明確な当局からの答弁がなく、委員会は空転を続け、結果、「継続審査」となり、本会議でも「継続審査」を可決しました。

今後の予定としては、1月中旬に再度委員会を開催し、再審査を実施。そして臨時議会を開催し最終結論を出すこととなっています。

### 当局の油断は否めない

今回この問題がここまで大きくなった理由としては、何と云っても市当局の油断であろうと思います。“さくら”の指定管理者へ民間が手を上げるなどとは思ってもおらず、いざ蓋(公募)を開けてみたら民間会社が名乗りを上げてきて、バタバタ・ドタバタ。募集に必要な仕様書も作成していなかったほど。

また、市長は「指定管理者制度には聖域はない」と発言していますが、市民や利用者の安心や安全、満足という聖域はあるはずで

にもかかわらず、この会館を利用する市民や各種団体の方たちの思いや意見に耳を貸すことなく、一方的に公募に踏み切ったことが、このような事態を招いた結果です。委員会は、年明け早々にも開か

れ再度審査をすることとなっています。

### 他の主な議案

条例関係では、「栗東市コミュニティセンターの設置及び管理に関する条例の制定」であり、これまでの地区公民館をコミュニティセンターとして運営していくことを定めたものですが、住民からの要望もあり、諸証明の発行業務については、向こう1年間はこれまでどおり市の職員が担うこととして、条例案を一部変更し、可決となりました。

予算関係では、平成17年度一般会計補正予算の提案であり、国民健康保険特別会計への繰出、生活保護費や老人保健事業など医療費や健診の増による追加、身体障害者のホームヘルプサービス利用増による費用増などなど、約3億2千万円を増額するものでしたが、賛成多数で可決となりました。

## RD処分場問題 違法埋立の実態 処分場から170本を超えるドラム缶類を発見

RDエンジニアリング産業廃棄物最終処分場(栗東市小野)での違法埋め立てや地下水汚染などの問題が発生し、住民運動が起こってから6年目を向かえた昨年9月30日に、懸案だったドラム缶確認の調査がようやく始まり、県の指導により、処分場西側の平地の掘削をRD社に実施させたところ、その場所から計170本を超えるドラム缶類が発見されました。

このことは問題発生当初から元従業員の方々などの証言をもとに“ドラム缶の違法埋め立て”の事実を県に訴えてきましたが、まったく聞き入れてもらえずに今日まで放置されてきたものです。

昨年9月30日に確認の為の掘削調査でまず5本が検出され、追加調査として暮れの12月16日から22日まで掘削をしたところ、証言どおりドラム缶が埋められていたものです。

ドラム缶の内容物については、サンプルを持ち帰り県が検査をしています。

いずれにしても、地下水汚染については、総水銀、ダイオキシンなどによる汚染が進行しており、また、ビスフェノールAやベンゼン等の有害物の存在もわかっています。地下水汚染防止のために一刻も早い原因物の発見と除去を私たちは求めています。

栗東市議会でも、議会としても対応していくことが進んでおり、今回の違法埋め立ての実態を県は直視し、英断的な対応を図ることに期待がかかっています。



▲処分場西側の平坦部の掘削で、12/16～12/22までの間に計105本のドラム缶、65本の18L缶が発見され、内容物は黒い油のような物体が入っていました。



## 講演会報告 私の心に響いた講演会

### イラク戦争と平和 ～命に国境はない～ 「報道の见えない壁の向こうで何が起きていたか？」

講師：高遠菜穂子さん

昨年4月、イラクにおいて今井紀明さん、郡山総一郎さんとともに武装グループによって、一時人質として拘束された「高遠菜穂子」さんを招いての講演会が、滋賀大学教育学部の学園祭企画として行われましたので、参加しました。会場は、学生や市民の方々約200人で一杯になりました。

壇上にたった高遠さんは冒頭、「昨年(2004年)4月の拘束事件の時は、大変なご心配とご迷惑をおかけしたことをお詫びします。皆さんのご支援があってこうやってイラクのことをお伝えできるのは命あつてのことで、心からお礼を述べたいと思います」と挨拶されました。

講演の内容は、混乱の続く現地で病院の調査や医薬品の運搬活動を通じて見聞きした被害状況を「報道の壁」の向こうの「事実」の話として講演してくださいました。

#### \*なぜ、ファルージャで戦闘が激しくなったのか？

2003年4月9日にバクダッドが陥落してから2週間たった4月24日に、ヨルダンのアンマンに1人で入った。すでにジャーナリストやNGOの人たちが集まっていて、バクダッドには日本人のジャーナリストたちと一緒に入ることになった。

ブッシュ大統領が戦闘終了宣言を出した5月1日に、初めてイラクの地を踏んだ。そのときの印象は、「まだ戦争は終わっていないのではないか？」という事だったという。

バクダッドの街中で、イラン人の青年2人に声をかけられ「ファルージャで大変なことが起きている。どうして誰も取材に来てくれないのだ」と言われ、高遠さんは「自分は何のためにここへ来たのか？病院の調査や医療品を運ぶ為ではなかったのか？」と思い、ファルージャに行った。

#### \*ファルージャの病院

ファルージャの総合病院に行った時、ベッドにはシーツがなく枕もなく、けが人の腕に巻かれていた添え木はダンボールで代用され、薬品庫には医薬品が殆んどないなどひどい状況だった。

また、使い捨ての手袋がないのでドクターや看護婦は素手で患者の手当てをしていて、その手は血だらけとなっていた。そのように、終戦宣言した後もどんどん死傷者が増えている状況だったと言ひ、患者やドクターから「なぜ日本はこの戦争に参加したのだ」と問い詰められたと言う。



▲2005年11月12日、滋賀大学において講演する高遠菜穂子さん。

#### \*報道の见えない壁

高遠さんは、この頃のファルージャでの戦闘による民間の犠牲者数をアメリカ軍は22人と発表。しかし病院の報告では731人。ファルージャの町ではカウントされない「命」がたくさんある。世界は気づいているのだろうか？と思ったと言う。

現地では、アメリカのジャーナリストは“米軍のスパイ”と呼ばれ、アジアのジャーナリスト、特に日本人には特別扱的なところもあったが、以前とは違う。

また中東のメディアには、アメリカからの圧力がかかっており、状況が厳しくなるにつれて報道する人がなくなったという。

また、昨年5月にニューヨークでイラク戦争の写真展を開いた際、ニューヨークの人は「全く知らない！」といった状況に驚いたと言う。「事実」を知った人の中には、「アメリカがイラクに対して大変申し訳のないことをした。イラクの人に謝りたいと伝えてほしい」と頼まれたと言う。

#### \*高遠さんの現在

高遠さんは、拘束事件以降の誹謗中傷に悩まされながらも、お母さんの助言により立ち上がり、現在は、ファルージャ支援プロジェクトの一員として、町の3つの学校を建て直す活動や、NGOとともにブロック工場建設のために日夜、活動を続けているとのことでした。

#### 【詳細】

高遠さんのブログ <http://iraqhope.exblog.jp/>

#### 【プロフィール】

- ・1970年北海道千歳生まれ
- ・麗澤大学外国語学部英語学科卒業、30歳になったのを機に仕事をやめ、以後インド、タイ、カンボジアの孤児院やエイズホスピスを手伝う。
- ・03年5月1日、ブッシュ大統領がイラク戦争の終結を宣言した日にイラク初入国。その後約2ヶ月にわたりNGOとともに病院調査、医薬品運搬、学校再建などに力を注ぐ。
- ・04年4月7日、4回目のイラク入国の際、ファルージャ近郊でイラク人の武装グループに拘束される。
- ・05年7月のバクダッド浄水場空爆を機に、イラクの命の水支援プロジェクトに参加。
- ・現在、イラク報告のために全国を奔走中。

## ～子どもはピッチャー 大人はキャッチャー～

### 「ハッピーに生きようじゃないか」

講師：金森俊朗さん

「いのちの授業」の実践で知られる、金沢市立西南部小学校教諭金森俊朗先生（59歳）の講演会が、草津市PTA連合会の主催で行われましたので参加しました。この講演会も会場は満杯状態でした。

講演の内容は、ごく普通の子どもでも、大人が「うちの子どもは天真爛漫だ!」と決め付けている子ども達でも、「悩み」や「悲しみ」はある。大人たちが全身で子ども達の悩みを聞き、悲しみを受け止めて、確かに返球してくれるキャッチャーであることが大事だと語っていただきました。

#### \*悩み・悲しみ・寂しさを書こう!

金森先生は自分の担任の4年生のクラスで、自分の少年時代と、これまでに担任した子ども達の悩みや悲しみを紹介した後、クラスの子どもたちに悩み・悲しみ・寂しさを全員に書いてもらったとの事。

そのことは、単なる慰めではなく勇気を出して心を拓き合った交流は貴重な学びだったと言う。

悪口を言われたり、仲間はずれにされた悩み、友達とうまく関係を結べない苦しさ、親が弟や妹ばかりかわいがり自分をかまってくれないという寂しさ、親の離婚や再婚問題での悩み、家族や親戚の人が次々に病気になる不安、父の長い単身赴任での寂しさ、テストの成績がいつも悪いという悩み、友達のように運動や習い事が上手になれないという悲しみ、かつていじめられたことがトラウマのようになって学校が好きになれないという悩みなどが、たくさん出されたとの事。

この「悩み・悲しみ・寂しさを書こう!」のヒントになったのが、自分が担任した“あゆちゃん”の作文とそれを発表したときの“まきちゃん”の反応だったそうです。

…あゆちゃんの作文抜粋…

「私はとっても勉強ができない。なぜかという、授業をちゃんと聞いているけど、どうしてもわすれてしまう。おぼえていたとしてもちょっとしかおぼえていない。私はいつもいつも、私はバカだと思ってしまう。勉強だけだったら、ちょっとはいいと思ったけど、私は運動もピアノもそろばんもできない。なんのとりえのない私が情けなくなった。勉強は何もかもやめたいと思うようになった。私はどうしても頭がよくならないと思う。だけどもどうしてもわからない。私はこういう自分が憎くなってきた。」

「私は、努力している私の気持ちを知らないのに、親が勝手に努力していないと決めつけたのが、とつてもいやだった。勝手に決めないでほしい」(実際の作文は原稿用紙6枚分)

その作文を読み終えた後、みんなで話をした時、“ま



▲2005年12月3日、草津市民交流プラザにおいて講演をする金森俊朗先生

きちゃん”は、「大人は子どもたちが努力しているのを知らないで、いつも勝手に決めつけて言う。もっと子どもの気持ちを知ってほしい」と話したそうだが、実は自分も苦悩の作文を書いていたと言う。

まきちゃんは、不登校気味で表情の暗い子。作文には父母の離婚と不登校の姉からの虐待で家出、自殺未遂、父に相談したいが経営する工場が倒産寸前で心配をかけたくないこと、他の誰かに相談したいができずに苦しんでいることを詳細につづり、最後に「この悲しみをどう貫いて生きて行ったらいいのだろうか」と書いてあったと言う。

教室では、この“あゆちゃん”の作文について2時間にわたり、多くの子が泣きながら自分の思いを述べ「人を包み込むやさしい雰囲気になった」との事。

#### \*子どもはピッチャー 大人はキャッチャー

先生は、「子供が内面に押し込んでいる現実、外に出すことで変えることができる。聞き合う仲間や、しっかりと受け止める大人がいれば、子供は面白いほどに自分を語る」とし、「子供がピッチャー、大人がキャッチャーになるべき」と投げ掛けていました。

その上で、子供に「こういう球を投げるといいよ」ということを、自分自身の生きているしぐさ、生きざま、生きている方向で「サイン」とし指し示すこと、どう返球するかも大切とポイントを強調されました。「大人は目的だけを一直線に目指すが、子供は目的にたどり着くまでにいくつもの発見をする。手段そのものが目的になるため、話したいことがたくさんできる。子供はいつも手紙を持っていると考えて」と話していただきました。

#### 【プロフィール】

- ・1946年石川県能登生まれ
- ・金沢大学教育学部卒業後、教職に就く
- ・現在、西南部小学校に勤務
- ・1989年から本格的に「いのちの授業」を開始
- ・金森学級の1年を追ったNHKスペシャル「涙と笑いのハッピークラス4年1組の授業」が2003年日本賞グランプリを受賞。
- ・その教育思想と実践は教育界のみならず医療・福祉関係者からも高い評価を得る。



# 一般質問

## ※BSE問題と学校給食 ※小動物飼育の安全性と命の教育

アメリカ産牛肉が輸入再開となったが、学校給食の食材として影響はないか？

また、加工品に対する安全確認は？

BSE問題の発生以降、学校給食において使用する牛肉は、滋賀県産のものを入札で指定し使用している。更に安全確認のため、納入業者に出荷証明書を提出させている。なお、納入業者の選定から入札まで、本市の給食共同調理場で実施している。

また、加工品についてはアレルギー対策の関係もあり、栄養士が国内産を選定するとともに成分調査で確認している。今後の対応として、県内のBSE検査については牛肉輸入再開後も全頭検査を行うことから引き続き滋賀県産の牛肉を使用する。また、鶏肉についても鶏インフルエンザの検査に合格したもののみが出荷されることから、牛肉同様の安全確認を行っている。

幼・保・小学校等での小動物の飼育管理の安全性と責任は？ 飼育体験を通じて命の尊さの教育は？

動物の飼育は衛生面での配慮が必要であるが児童に清潔な状態だけの動物に触れさせるのでは教育的側面が欠落し、生死や糞尿の処理などを通してこそ学ぶべきものがあると考えます。

飼育は児童・園児が中心になって水やエサの世話をし、小動物の生態や命の大切さを育てている。また職員全体で飼育観察し、常に小動物の状態をチェックして、異常が発見されれば、必要に応じて動物病院で診察を受けるなど配慮している。また、飼育動物の死骸の取り扱いについては、一応廃棄物という扱いで処理している。

飼育の責任は基本的に校・園にあるものであり、学校施設長の判断で実施している。安全衛生面については、活動後の徹底した石鹸での手洗い等、最大限の注意を払っている。

## 写真で見る活動報告

### 10月～12月



▲第1回人権セミナー栗東 (10/14)



▲上砥山スポーツの集い (10/9)



▲第23回ふれあい健康広場 (10/9)



▲少子高齢対策特別委員会視察 (10/12)



▲第2回人権セミナー栗東 (10/14)



▲第1回栗東森林のフェスティバル (10/16)



▲RD産廃処分場問題住人集会 (10/16)



▲金勝ふれあい広場 (10/30)



▲寝屋川北小学校視察 (11/2)



▲平成17年金勝老人クラブスポーツ大会 (11/6)



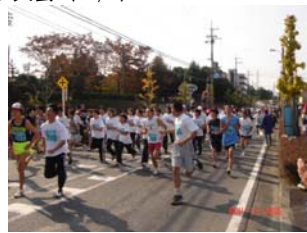
▲小柿地域第8回ふれあい文化祭 (11/6)



▲栗東市民ネットワーク視察研修 (11/11)



▲金小まつり (11/12)



▲第48回栗東ハーフマソン (11/13)



▲連合滋賀第9回定期大会 (11/16)



▲連合議員団ネットワーク会議 (12/26)

# 会派研修報告

## 11月9日～11日 長野・石川

地方分権時代におけるまちづくりとして、単に“合併”に頼るまちづくりではなく、また国の「三位一体の改革」の断行による補助金や地方交付税の削減にも負けず、住民の積極的な参加と工夫によってその地域が持つ歴史的遺産や文化を守り、独自の政策によってまちづくりを進めている「自立する自治体」を視察し、当市の活性化に活かすことを目的として視察を行いました。

### 【長野県小布施町】

人口約1万1千人のまちに、年間120万人もの観光客が訪れる小布施町。その仕掛けは何かを探ってみた。

小布施町は、長野県北部、長野盆地の北東に位置し、人口11,460人の町。

今回の小布施町の視察に協力していただいたのは、(株)ア・ラ小布施で事務局を担当されるとともに小布施町生活支援ハウス施設長でもある呉羽勝正さんという方で、唐沢市長が「まちづくりは人づくりから」を言われているそのままの人柄であった。小布施町のまちづくりについて親切丁寧に説明をしていただいた。

小布施町の町並みは、調和良く整備され、まちのいたるところに

花壇やプランターに色とりどりの季節の花が植えられ、観光客の心を和ませてくれていた。

また、“栗の小径”と呼ばれている道には、住民のアイデアによる小布施名産の栗の木のブロックが敷き詰められていた。

北斎館にも立ち寄ったが、北斎館には日本で唯一、葛飾北斎の肉筆画を展示しており、感動を覚えた。

小布施町は、約40億円という極めて小規模の一般会計予算ではあるが、名物の「栗菓子」を商品としている業者(10社)が独自に3.5億円を拠出し、まちづくりの資金にしているなど、住民参加が大きくまちづくりに貢献しているため、美術館や博物館などの施設も多いが、管理は行き届いており整然とした町並みを保っていた。

呉羽さんは、「うちのまちではインフラ整備はほとんど終了した。だから合併はしなくてもまちは運営できる」ときっぱり。「合併ありき」ではなく、まさに自立の道を進んでいる小布施町であった。



▲栗の小径

### 【長野県下條村】

まちの道路舗装工事や水路補修などを地域の人が手弁当で行う「資材供給工事」が行われており、その実態について視察した。

長野県の最南端の下伊那郡のほぼ中央に位置し、人口4,215人の高齢化率28.3%の村。

「資材支給事業」を目的に視察に行ったが、思わぬ副産物に出会った。それは、「福祉施策の充実」と「徹底した行財政改革」の断行であった。

このまちでも、「合併はしない」と自立の道を選び、独自でまちの活性化について取り組んできた。その施策の一つ一つが、住民ニーズとマッチし、尚且つ住民意識の高揚につながっていることには

驚いた。

また、徹底した行財政改革の一方で、村に目立つのはさまざまな“箱物”であった。「コスモスの湯」やレストハウス「レスト秋桜」、村立図書館、インドアスポーツセンター、文化芸能交流センター、医療福祉保健総合健康センター、道の駅等々……。

国や県の補助金の効率的な活用と、維持・管理費の削減をめざし、村の直接管理にしたとのであったが、このような施策の取り組みにより、人口減少の時代にあっても、この村は今後も人口は増え続けるであろうと思う。

ただ、地場産業があまり発展していないことが将来に対する課題であると感じた。

※ページの関係で金沢の視察分は掲



▲土日になると村のあちこちで住民が農道等の整備をしている

載しませんでした。詳細はホームページをご覧ください。

**市政に関する様々な疑問、質問、要望等、お気軽にご相談ください**

TEL 077-558-0490(事務所)

FAX 077-558-2762(事務所)

TEL・FAX 077-558-0241(自宅)

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/t-tamura/>

E-mail:taka-3@fa2.so-net.ne.jp

**ホームページもご覧ください**